



Title	泉鏡花『南地心中』の大阪：見物、演劇、ならびに心中
Author(s)	西尾, 元伸
Citation	語文. 2017, 106-107, p. 44-55
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/70983
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

泉鏡花『南地心中』の大阪

——見物、演劇、ならびに心中——

はじめに

『南地心中』（明治45年1月）は、舞台役者の友人に招かれて初めて大阪を訪れた「初阪」という男が芝居見物の折に隣の棧敷席に見た、美しい女をめぐる展開する作品である。女はお珊という名であり、船場の大金持、丸田官蔵（丸官）に落籍されている。あるとき、お珊は天王寺見物に出かけ、そこで猿廻しをしていた美少年、多一に惹かれ引き取る。しかし、多一には将来を言い交わした美津という女性がいた。お珊はそれに気づき、住吉大社の神事「宝の市」の日、多一と美津に御囃子姿をさせ、お珊自らは市女姿をして練行列に加わり、そのなかでふたりを道連れにして心中をしようとする。

『南地心中』の成立については、既に田中勲儀氏による詳論があり、明治四十四年に道頓堀中座に出演中であつた喜多村緑郎の招きによって大阪旅行をした際に、鏡花が見た住吉大社の神事

西 尾 元 伸

「宝の市」に対する感動が、本作成立の主要な契機となったこと」¹、また、「『巳さん』信仰が介在する淀君への関心、富田屋の芸妓小三をはじめとする上方女性への親近感、さらに関西方言の積極的な収集など」「大阪の地に根づいた」ものへの取材によって本作が成立したことを指摘している。加えて、お珊らの心中が果たされる「宝の市」の練行列が、「通俗な社会とは一線を画した純粋境」として紡ぎ出された世界であることも論じている。『南地心中』の成立過程および読解について、田中氏の論考によって明らかにされたところは非常に大きい。

本論においても「大阪」を舞台とした作品であることが考察の鍵となる。『南地心中』のひとまずの視点人物「初阪」は、「此の初阪とは、伝へ聞く、富士、浅間、大山、筑波、はじめて、出立つを初山と称ふるに倣つて、大阪の地へ初見参と云ふ意味である」²（一）とある通り、初めて大阪へやって来た旅行者である。『南地心中』の大阪の町は、この旅行者の目を通して見られるこ

となる。「ひとまず」と述べたのは、これも田中氏に指摘のすることだが、『南地心中』では、終盤「宝の市」の日を描くところから、「初阪」が作品の表面からは後退し、視点人物が特定できなくなるからである。まずは、「宝の市」当日の心中が成し遂げられるまでに、「初阪」の視線のなかにどのような「大阪」が浮かび上がっているのかを考え、これを考察の起点としたい。

一

『南地心中』は、舞台役者の友人に招かれた「初阪」と呼ばれる男が天満橋の上でお珊の姿を見つけるところからはじまっている。「初阪」は友人一座の男衆に案内され、大阪見物の途中、天満橋から大阪天満宮へ向かうところであった。「初阪」の言うなかに「だつて、住吉、天王寺も見えない前から」(三)とあることからすると、この後に住吉大社、天王寺へと向かう予定であったと予想できる。前日には「高津の宮」へ行き、願掛けの蛇を売る話を聞いて、「黒焼屋の前を通つた時は、軒から真黒な氷柱が下つてるやうに見えて冷りとした」(五)という。このようにして「初阪」が、初めての大阪を見物して歩くことは『南地心中』の大きな要素のひとつと言えよう。大阪城を見たときのことを「初阪」は次のように言う。

「分りましたよ。真田幸村に対しても、決して粗略には存じません。萌黄色の海のやうな、音に聞いた淀川が、大阪を真二つに分けたやうに悠揚流れる。

電車の塵も冬空です……澄透つた空に見々と太陽が照つて、五月頃の潮が押寄せるかと思ふ人通りの激しい中を、薄い霧一筋、岸から離れて、宛然、東海道で富士を視めるやうに、あの、城が見えたつけ。

(略)

其の、空に浮出したやうな、水に沈んだやうな、而して幻のやうな、然うかと思ふと、歴然と、あゝ、あれが、嬰兒の時から桃太郎と一所にお馴染の城か、と思つて見て居ると、城の其の屋根の上へ、山も見えぬのに、鶴が乗つて来さうな雲が、真黒な壁で上から圧附けるばかり、鉛を熔かして、むら／＼と湧懸つて来たらうではないか。」(二)

「初阪」は、大阪にまつわる戦国の武将「真田幸村」を思い浮かべ、「音に聞いた」淀川の流れを眺め、「宛然、東海道で富士を視めるやうに」大阪城を見る。昔話「桃太郎」と並列されていることにも注目してよい。「初阪」の視線が、まさしく名所巡り、大阪見物のそれであったことを示している。

しかし、『南地心中』が執筆された当時、大阪城に天守閣はなかった。大阪城の天守閣再建が計画されたのは昭和に入ってからのもので、落成式は昭和六年十一月であった。例えば、「読売新聞」(昭和六年十一月八日)は、以下のように報じている。⁽²⁾

大阪城天守閣の落成式 【大阪電話】大阪市が昭和大典記念として工費四十万円を投じ昭和四年のはじめから着工した大阪城天守閣の竣工式は七日正午から京阪神並に近畿各府県名

士約三千名を迎へ盛大に行はれた

「初阪」の見る大阪の風景は、さらに以下のように続く。

七筋ばかり、工場の呼吸であらう、黒煙が、恠う、風がないから、真直に立騰つて、城の櫓の棟を巻いて、其の蔽被つた暗い雲の中で、末が乱れて、むら／＼と崩立つて、倒に高く淀川の空へ靡く。……

なびくに脈を打つて、七筋ながら、処々、斜めに太陽の光を浴びつゝ、白泡立てて渦いた、其の凄かつた事と云つたら

天守の千畳敷へ打込んだ、関東勢の大砲が炎を吐いて転がる中に、淀君をはじめ、夥多の美人の、練衣、紅の袴が寸断々に、城と一所に滅ぶる景色が、目に見える。……雲を貫く、工場の太い煙は、丈に余る黒髪が、纏れて乱れるやう、而して、倒に立つたのは、長に消えぬ人々の怨恨と見えた。

(二)

大阪城にかかる黒雲は、工場の黒煙に由来しているのだが、その黒雲のかかる大阪城の様子を見ながら「初阪」は、大坂夏の陣において関東勢の攻撃によって滅びようとする「淀君」たちの「怨恨」を思い浮かべている。〈近代〉を象徴するかのような工場を視野に収めながら、古い歴史上の天守閣を仮構し思い浮かべる。これが「初阪」が大阪を見るとき⁽³⁾の視線である。

論者は以前、別稿において、京都を舞台とする鏡花作品『楊柳歌』(明治43年4月)について論じたことがある⁽³⁾。あらためて詳論することは避けるが、『楊柳歌』においては、東京から京都へ

やって来た女形の俳優・清之助が、自らを「おのぼり」と認識するところに、時代錯誤とも言える見物人の視点が反映されていた。事情は、『南地心中』の「初阪」についても、大きくは変わるまいと思われる。道頓堀中座で友人の芝居を見物する「初阪」の棧敷へ美津が連れて来られたときのことである。

「其の二間しかなかつたんだ。二丁がカチと入つた時さ。娘を連れて、年配の出方が一人、横手の通の、竹格子だね、中座のは。……扉をツイと押して、出て来て、小さく成つて、背後の廊下、お極りだ、此の処へ立つ事無用。彼処へ顔だけ出して踞んだもんです。(旦那、此の娘を一人願はれませんか。ござりませうか。内々のもので、客ではござりません。お部屋へ知れますと悪うござりますが、貴下様思召で、)と至つて慇懃です。

資本は懸らず、恠う云ふ時、おのぼりの気前を見せるんだ、と思つたから、さあ／＼御遠慮なく、で、先づ引受けたんだね。」(一六)

「初阪」は「おのぼりの気前」を見せる出来事と、意気に感じて面識のない美津を棧敷に座らせることに同意したという。ここには、上方への「おのぼり」で気分を高揚させる「初阪」の姿が窺える⁽⁴⁾。

天満橋でお珊の姿を見たときの印象も、そうした見物の視線の延長線上にあるう。

「真個そりや悚然としたよ。ひとりでに、あの姿が、城の中

へふいと入つて、向直つて、此方を見るらしい気がした時は。

……

黒い煙も、お珊さんか、……其の人のために空に被さつたやうに思つて。

天満の鉄橋は、瀬多の長橋ではないけれども、美濃へ帰る旅人に、怪しい手箱を託けたり、俵藤太に加勢を頼んだりする人に似たやうに思つたのだね。

由來、橋の上で出会ふ綺麗な婦は、凡て凄いとしてある。

—— (四) ——

「初阪」は、「瀬多の長橋ではないけれども」と前置きしつつ、瀬田の唐橋（滋賀）にまつわる伝承をふたつ思い浮かべる。ひとつは『今昔物語集 卷第二十七美濃国紀遠助値女霊遂死語第二十一』⁵に見られる怪異譚で、中身を見てはならぬと預かつた手箱の中にたくさんのお目玉と男根が入つていたというもの。もうひとつは「俵藤太」の百足退治譚である。ともに橋の上で妖怪めいたものに遭う話であり、それだけお珊の印象に凄みを感じたのであろう。後の作品展開とかかわつて注目したいのは、俵藤太に百足退治を頼んだ女の方である。御伽草子『俵藤太物語』によつてこの女の言うところを確認してみたい。

わらはは近江の水うみにすむ也。むかし久かたの天の道ひらけ、あらかねの土かたまりて、この秋津洲の国さだまりし時より、かの湖水に居をしめ、七度まで桑原となりしにも、かたちを人に見せず。(略) かの山にむかでといふもの出でき

て、野山のけだ物、江河のうろくづを、むさばる事年久し。これにわらはが類、たび／＼かれに服せられ、三熱の苦しみのうへに愁嘆の涙かはくひまもなし。いかにもしてこの敵を滅ぼし、安全のいにしへになさばやと、はかりことをめぐらすと言へども、わらはが類として、たやすくだいらげん事かなひがたし。もし人間にしかる器量の人ましまさば、ちなみ寄りてたのみ侍らばやと思ひ、勢田の橋に横たはつてゆききの人をうかぶに(略)

実はこの女は、瀬田の唐橋に「横たはつて」いたのを俵藤太が踏みつけた、大蛇の化身であつた。先行論で詳しく述べられた通り、『南地心中』においてお珊と蛇との結びつきは深い。お珊はかつて大阪藝妓の藝比べがあつたときに、「執念の深いもんだから、あやかる気で」(四) 生きた蛇を鳩尾に巻き付け、「道成寺」を舞つたという。また、作品の終盤、心中を遂げようとする際にも願を掛けた蛇を両袂に入れることになる。『南地心中』は、お珊という女性の執念を蛇に象徴させた作品と言えようが、「初阪」は、冒頭の天満橋の上で感じた凄みの内に、これらの結びつきをいち早く直観していたことになる。

二.

はじめての大阪見物であることと同様に、「初阪」にとって大きな意味を持つているのが、俳優の友人に招かれての大阪の旅であつたことであろう。「初阪」が男衆に案内されて大阪を見物し

て歩くのは、中座で友人の出演する舞台を観に行つた翌日のことであつた。その舞台見物の折、棧敷席でお珊の姿を見かけていたことから、天満橋でも彼女に目に留めたのである。

そのような事情を考えると、『南地心中』の作中人物たちの会話に、歌舞伎などの演劇作品にまつわる様々な言葉が混じるのは不自然なことではない。

例えば、冒頭で「初阪」を案内する俳優部屋の男衆は、「時間の都合で、其方へは廻らないまでも、網島の見当は御案内をしろつて、親方に吩咐かつて参つたんで、彼処で一ツ、桜宮から網島を口上で申し上げようと思つて居たのに」(一)と言う。大阪見物のなかで「網島」が名所となるのは、そこが『心中天網島』、紙屋治兵衛と小春との終焉の地であつたからだろう。治兵衛と小春は、この世では実現することのできない未来を、来世で叶えるべく心中に赴く。

此の世を捨てて行く身には聞くも恐し天満橋淀と大和の二川を一つ流れの大川や水と魚とは連れて行く我も小春と二人連一つ刃の三瀬川手向の水に請けたやな何か歎かん此の世でこそは添はずとも未来はいふに及ばず今度のくずつと今度の其の先の世までも夫婦ぞや

「初阪」がお珊の姿を見つけた天満橋は、『心中天網島』「名残の橋づくし」で治兵衛と小春とが通つた道筋にある。「初阪」が天満橋にお珊を見つけたのは偶然にすぎまい。しかし、作品全体を見渡すならば、それが心中に縁のあるこの場所であつたことは

看過できない偶然となろう。

さらに、棧敷席で舞台見物をする「初阪」が、多一をはじめて見た場面に注目してみたい。舞台見物中の「初阪」の隣の棧敷席へ、「船場の大金持」(十二) 丸官が、お珊ほかの芸者などを連れて入り、芝居の上演中にもかかわらず、大酒を飲んだ様子で大声に喚き散らす。お珊の膝枕で鼾をかいて寝はじめの。「初阪」はその様子を見ながら、「妾はい、なぶりものにされたぢやないか」(九) と思つていたところ、手代の多一がやつて来て、主人の丸官に用件を話しはじめる。そのうち、丸官は多一に無理難題を言ひ出す。

「いや、黒服の狂犬^{やまいぬ}は、まだ妾の膝枕で、ふんぞり返つて高鼾。其さへ見ては居られないのに、……其手代に違ひない。……當時の久松と云つたのが、前垂がけで、何か急用と見えて、逢ひに来てからの狼藉が、真個目に余つたんだ。(十)

丸官の金にまかせた傍若無人ぶりを「狂犬」と言い表しているが、注目すべきは多一の方である。「初阪」は多一のことを「當時の久松」と言う。多一は、天王寺の境内で猿廻しをしていたところを、お珊が「俳優の誰とかに肖てる」(九) と気に入り連れ帰つたのであるから、歌舞伎の登場人物に似ていても不思議はない。しかし、それが「久松」であることは見過ごせない。「久松」とは、『新版歌祭文』に登場する久松を指しているよう。大阪の酒屋の娘お染と丁稚の久松とは、身分違いの恋からやがて心中に至る。以下に、久松が養家に返され、お染がそれを追つて来る「野

崎村の段」を引用する。⁽⁹⁾久松の養家では、養父・久作が娘おみつを久松の許嫁とし、ふたりの祝言を挙げさせる考えであった。

いやじゃ／＼わしやいやじゃ今となってそふいやるは是までわしに隠しやつた言号の娘御と女夫になりたい心じゃの是非山家屋へ行ならば覚悟はとふから究めて居ると用意の剃刀取直せば夫は短氣と久松が留てもとまらずイヤ／＼／＼そなたに別れ片時も何楽しみに生て居よふ留ずと殺して／＼と思ひ詰たる其風情そんなら是程申てもお聞わけはござりませぬか添れぬ時は死るといふ誓紙に啞がつかれふかいのふ達て申せば主殺し命にかへてそれ程までに思ふが無理か女房じゃもの叶はぬ時は私もいつしよにお染様久松と互に手に手取かはす悪縁深き契りかや

お染久松の場合にも、この世で「叶はぬ」ものを得るために心中が決意される。丸官の手代である多一が「当時の久松」と呼ばれるならば、お染久松の心中が、本作においてやがて起こるべき心中に先駆けて浮かび上がることになる⁽¹⁰⁾。

大阪という土地は、先行する文学作品において、多くの心中が描かれてきた土地でもある。作品の冒頭において「初阪」がお珊の姿を認める天満橋、また中座で多一を初めて見たときについてこれらが心中立ての先行作品と関連づけて語られていることの意味は大きからう。『南地心中』が、過去に大阪を舞台とするいくつかの先行作品に描かれてきた心中立てを、当代の大阪において実現する作品だからである。

その他にも、「初阪」と案内の男衆とが、蛇屋で買った蛇を紙袋に入れて一晩寝かせ、そうして祈願した蛇を高津の宮裏の穴へ放すというまじないについて話をしている途中、すれ違う女性を指して「初阪」が「あの、忠兵衛の養母と云つた隠居さんが、紙袋を提げて居るから」(五)などと冗談を言う場面がある。この場面で言及されたのは、これも大阪を舞台とする作品『冥途の飛脚』の「忠兵衛」で、遊女・梅川との恋からやがて破滅へと向かう人物である。「初阪」が先行する文学作品を二重写しにするように大阪の町を見物していることは確かであろう。また、『南地心中』のなかからお珊と多一の出逢いの場面を抽出して戯曲に脚色した『鳥笛』(大正3年1月)のなかでも、多一が美津に向かつて「此れ見や、財布にやがて二両。遣果した忠兵衛の二分ぢやない。儲かつた、儲かつた」と言う部分がある。これも、『南地心中』の大阪が先行作品を意識することによって生み出された町であることを示唆しているよう。

三.

ただし、『南地心中』が特徴的なのは、歌舞伎を中心とした演劇作品への言及が、「初阪」の視線のなかだけにとどまっていな点にある。

大阪見物続けた「初阪」は、大阪天満宮の亀の池でお珊に出会い、言葉交わすことになる。案内役の男衆と、亀の池に泳ぐ亀を見ていたときのことである。このとき、一匹の亀が何度も水

から這い上がりとしては沈み、なかなか成功しない様子であった。それを見て、男衆は「蛙だと青柳硯と云ふんです」（十六）と言う。いわゆる柳の下に蛙を連想し、男衆が役者であったために、『小野道風青柳硯』『東寺門前の段』をふまえて演目「青柳硯」が口をついたのであろう。念のため、該当の箇所を引用する。

柳陰沢の蛙の草を分け妻呼顔に這出る柳の糸の枝垂れ葉にしたる雨のばら／＼井出の玉水溜り水葉に浮く露を虫か逆二寸飛ではたと落三寸四寸いつの間にがはと飛付蛙の振舞目放しもせず見入し道風

「青柳硯」の蛙を彷彿する亀の様子を見て、男衆と「初阪」は「執念深いもんですね。」「あれ迄にしたんだ、揚げて遣りたい。が、最う弱つたかな」（十七）などと声を掛け合う。

ところが、お珊にとつてはこの亀の様子はより切実なものに映つたらしい。「思を逃げんと気がかりなよつて」（十七）と言い、帯留を投げかけて這い上がるのを手伝おうとする。

帯留は、銀の曇つたやうな打紐と見えた。

其の尖は水に潜つて、亀の子は、ばくりと紐を噛む、ト袖口を軽く袂を絞つた、小腕白く雪を伸べた。が、重量がかかるか、引く手に幽に脈を打つ。其の二の腕、顔、襟、頸、膚に白い処は云ふまでもない、袖、袂の、艶に色めく姿、爪尖まで、——宛然、細い、黒髪の毛筋を以つて、線を引いて、描き取つた姿絵のやうであつた。

池の面は、蒼く、お珊の唇のあたりに影を籠めた。

（略）

打紐に又脈を打つて、紫の血が通ふばかり、時に、腕の色ながら、しろ／＼と鱗が光つて、其の友染に搦んだなりに懷中から一条の蛇の蛭り出た、思ひかけず、ものの凄じい形に成つた。（十七〜十八）

「初阪」たちでさえ「執念深い」と言つた亀とはいえ、これを、逃げられない「思^{おもひ}」とまで感じ、見過ごすことができなかったのは、お珊の胸中にも切実な「思」があつたことを想像させよう。それどころか、お珊の懷中から蛭り出した蛇は、お珊自身の、思いを逃げたい「執念」を明らかにする。

もちろん、このときお珊が考えていたのは多一のことであらう。後に心中を成し遂げようとするとき、お珊は「宝市の此の服裝で、大阪中の人の見る前で、貴方の手を引いて……なあ、見事丸官を蹴て見せう、と命をかけて思うたに」（二十九）と言う。お珊が蛇を懷中にし、一念掛けて逃げようとしたのは、旦那と妾という、金銭によつて支配される丸官との關係を断ち、自らの思いによつて相手を選ぶことであつたはずである。

ところが、お珊は知らずにいたが、多一には言い交わした女性がいた。「名はお美津と云ふ、逢阪の辻、餅屋の娘」（十八）である。気づいたお珊は美津の餅屋を訪れ、そこで偶然、多一が居るのに出会う。このとき、多一はお珊の急な来訪のため、床下に隠れていた。翌日、ふたりに「宝の市」の御囃子装束をさせたお珊は、床下に隠れた多一を思い出して言う。

「何や……怪我に貴方は何やかて、美津^{みい}さんは天人や、其の人の夫やもの。まあ、二人して装束をお見やす、雛を並べたやうやないか。

けどな、多一さん、貴下な、九太夫やつたり、其のな、額の疵で、床下から出やはつた処は仁木どすせ。沢山忠義な家来では孰方やかてなさうな。」

と軽口に、奥もなく云うて退けたが、ほんのりと潤みのある、臉上に淡く影が映した。(二十二)

お珊がふまえているのは、『仮名本忠臣蔵』「祇園一力の場合」において、高師直の手下となった斧九太夫が床下に隠れ、大星由良之助の様子をうかがう場面と、『伽羅先代萩』「足利家床下の場」において、妖術で鼠に化した仁木弾正が荒獅子男之助に額を鉄扇で打たれる場面とである。斧九太夫、仁木弾正とも、敵役であるところに、お珊の心情が反映されているのではあるまいか。冗談めかしてはいるが、「ほんのりと潤みのある、臉上に影が映すところに仄めかされるように」、「沢山忠義な家来では孰方やかてなさう」というのが本心であろう。多一を猿廻しから丸官の手代に取り立て、思いを寄せていたお珊にとって、多一の行為は裏切りであった。

ところで、お珊が多一と美津にこうした言葉をかけるのは、「宝の市」当日、ふたりの仮祝言においてである。儀式は三人で執り行われた。つまり、この場面に「初阪」の視線は全くなかった。そのため、これ以降「初阪」は作品の表面からは

後退せざるを得ない訳である。既に見てきたように、「初阪」の視線は、当時の大阪の風景のなかに歴史上の人物や伝承を幻視することを可能とし、大阪を舞台とする演劇作品を思い浮かべてきた。しかし、「初阪」が作品の表面から後退してもなお、演劇作品への言及は重なり、この場面ではそれが「初阪」には見えなかった多一の一側面を明らかにすることになる。

四.

さて、お珊は美津の餅屋を訪ねた後、多一と美津が「宝の市」の当日に仮祝言を挙げて夫婦になれるよう取りはからい、丸官に認めさせる。そして、仲人としてふたりに仮祝言を挙げさせた後、閨を与える。

一方で、丸官は同じ日、多一に再び猿廻しの藝をさせようとする。多一と美津の閨に踏み込んだ丸官は、「練ものを待つ内、退屈ぢや。多一やい、皆への馳走に猿を舞はいて見せてくれ。恥辱ではない。汝や、丁稚から飛上つて、今夜から、大阪の旦那の一人。旧を忘れぬためと云ふ……取立てた主人の訓戒と思へ」(二十六) などと言ひ猿廻しを強要するが、ただし、猿は連れて来られなかった。多一がかつて使っていた猿は、美津の餅屋で既に絶命していたからである。お珊がこのとき既に、多一と美津の祝言の盃に毒を盛っていたことを考えると、やはりお珊がかかわっていたのだろうが、使いとして留守中の美津の餅屋へ猿を連れに行つた宗八という幫間の言葉によれば、「悪食がないいた様子」

で「血を吐いて斃ち果てて」(二十六) いたのだという。

丸官の求めに応じて多一が唄いだすと、丸官は周囲の藝妓らに猿の替わりをするよう促すが、皆は躊躇する。これを見て、美津は「私が猿を舞ひまっせ。旦那さん、男のためどす。畜生に成つてな、私が天王寺の銀杏の下で、トン／＼踊つて、養ふよつてな。世帯せいで大事な、もう貴下、多一さんを虐めんとおくれやす」(二十七)と、猿の替わりを引き受け、多一の唄にあわせて舞う。同時に、多一と美津は吐血、お珊が毒を盛ったことが明らかとなる。

「船の中には何とお寝るぞ、苦を敷寝に、苦を敷寝に楫枕、楫枕。」

玉を伸べたる脛もめげず、ツト美津は、畳に投げて手枕した。

其の時は、別に変つた様子もなかつた。

多一が次第に、歯も軋むか、と声を絞つて、

「葉越しの葉越しの月の影、松の葉越の月見れば、しばし曇りて又冴ゆる、しばし曇りて又冴ゆる、しばし曇りて又冴ゆる……」

ト袖を捲いて、扇子を翳し、胸を反らして熟と仰いだ、美津の瞳は氷れる如く、瞬もせず睜ると斉しく、笑靨に颯と影がさして、爪立つ足が震へたと思ふと、唇をゆがめた皓齒に、蒼のやうな血を囁んだが、烏帽子の紐の乱れか、つて、胸に千條の鮮血。

「あ、」

と一声して、ばつたり倒れる。人目も振も、しどろに成つて背に縋つた。多一の片手の掌も、我が唇を圧余つて、血汐は指を溢れ落ちた。(二十七)

このとき多一が唄っているのは、長唄『猿舞』、あるいはそれに類するものであらう。一部を引用する。⁽¹⁹⁾

猿が参りてこなたの御知行、まさる目出度き能仕る、踊るが手許及びなき水の月取る猿澤の、池の漣ゆう／＼たり。さす手引く手の末広や。

月に譬へし止観の窓、こなたのお庭を見上ぐれば、片割れ月は宵のほど、松の葉越しの月見れば

暫し曇りて又冴ゆる、あすは上手もの、船が上手もの、おもたげなく、およるきみよの、船の中にはなにとおよるぞ、苦を敷き寝の楫枕。

多一の唄にあわせて舞う美津や、戯曲『鳥笛』において美津が「敷奥座の上の太鼓を見て、一寸頂き、トトン、トトンと敲く。五助猿(注・多一の使う猿の名)手振て踊る」というような様子を見れば、天王寺の境内で多一が行つた猿廻しの藝が窺い知れよう。これを即座に舞台上での上演と同様に見なすことはできまいが、太鼓や長唄にあわせて猿を踊らせる多一の猿廻しの藝もまた歌舞伎の演目に通じるものである。

ともかく、美津は猿に扮し、「畜生」になるほどの覚悟で丸官に見得を切つた。美津は、親の残した借金に自らも苦しめられる

身である。それは、丸官が我が物顔に振りかざす金銭の力を、惚れた「男のため」という思いが越えた瞬間であつた。

しかし、多一と美津はお珊の盛つた毒によつて命を落とす寸前であつた。仮祝言の盃を与えるとき、なかなか盃を取ろうとしないう二人に向かい、お珊は「早うおしや！ 邪魔が入ると成らんよつて」（二十三）と言つていた。お珊には、「邪魔が入る」心配をすると同時に、練行列に加わるまでにふたりに毒を盛らなければならぬという事情があつたからである。多一と美津が盃を取らなかつたのは、お珊を疑つたからではない。多一が「両方のお袂の中が動きます。……美津は、あの、其が可恐いのでござります」（二十三）と言う通り、お珊が袂に入れた二匹の蛇を恐れただのである。蛇は、早く奉公をやめふたりで夫婦になれるようにと祈を掛けて、多一と美津がそれぞれに買い求めたものであつた。それをお珊が「死にたいほどの事もある。……何々の思が遂げたいよつて、貴方二人に類似りたさに、同じ蛇を預つた」（二十四）のである。お珊の遂げたい思ひは、既に心中という形に具体化していたに違ひない。震えながら美津が盃を受けるときの様子に注目したい。

美津は盞を震へて受けた。

手の震へで滴々と露散る如き酒の雫、蛇の色ならずや、酌参るお珊の手を掛けて燈の影ながら、青白き艶が映つたのである。（二十四）

美津が受けとる盃の酒に「蛇の色」「青白き艶」が映る。盃は、

お珊の思ひの色を映した毒酒であつた。大阪の土地に描かれた先行作品のなかの人物たちがそうであつたように、この世で実現できないものを、あの世で叶えようとするのが心中であらう。お珊にとつては、金銭で縛られる現実に対抗する「思」の実現であつたはずである。

おわりに

『南地心中』のなかで、「初阪」という旅行者の視線によつて見物される「大阪」は、現実の風景の上に歴史や伝承、既存作品の登場人物などの幻を重ねることのできる町であつた。その幻が、お珊の上に蛇の影を直観させることさえあつた。また、大阪がいくつもの心中立ての先行作品の舞台となつてきたことが意識されていた。それらの作品に倣うように、お珊の心中が成し遂げられることも既に述べた。

あらためて注目しておきたいのは、そうした大阪の姿を導き出した視線の持ち主「初阪」が、心中が遂げられる「宝の市」当日以降、作品の表面から後退することである。これはつまり、「初阪」が大阪を見る視線は『南地心中』の作品世界を導き出してはいるが、作品のはじまりから終わりまでを覆うものではないということである。

では、『南地心中』を統べるものとして、何を想定することができようか。ひとつには、お珊という女性の、思ひを遂げようとする「執念」があるう。『南地心中』をはじまりから振り返ると、

冒頭で「初版」が出会い「今のは」(一)と問わざるを得ない強い印象を与えた「阪地の婦」(四) お珊が、心の内に抱えた思い、「執念」を露わにしていく過程と言える。そのお珊の「執念」を幾度も作品内に登場して象徴するのが、先行研究が指摘した「已さん」信仰による蛇への願掛けであった。お珊が多一らと心中を遂げようとするとき、そこに丸官が「忿怒」(二十九)の握拳を振り上げて迫ろうとする。そのときお珊は両袂の蛇を放つ。

靴足袋で青い足が、柵を踏んで乗らうとするのを、一目見ると、懷中へ衝と手を入れて、両方へ振つて、扱いて、投げた。既に袋を出て居た蛇は、二筋電の如く光つて飛んだ。

わ、と立騒ぐ群集の中へ、丸官の影は揉込まれた。一人渠のみならず、もの見高く、推掛つた両側の千人は、一斉に動揺を立て、悲鳴を揚げて、泣く、叫ぶ。茶屋揚屋の軒に余つて、土足の泥波を店へ哄と……(二十九)

放たれた蛇が丸官を阻む。お珊の「執念」ともいうべき思いによつて、金銭の力では踏み込めない場所は守られる。

さらに、もうひとつ考えることができるとすれば、それは、「初版」が作品の表面から後退しても、お珊ら他の人物による歌舞伎を中心とした演劇作品への言及が重なっていくことであろう。やがて、お珊や多一らは演技する側に転じる。「宝の市」の神事のなかで心中が成し遂げられるとき、お珊は市女姿に、多一と美津は御囃子姿に扮していたことに留意したい。日常を離れ、何者かに扮することによって、日常を縛っていた金銭の力を超越する

ことができたのである。お珊ひとりではない。美津もまた、死を迎える直前に丸官に向かい、多一は自分が養うと見得を切つてみたが、それは多一の唄にあわせて猿に扮したときであった。

「宝の市」の練行列にそのような意味合いを見いだしたとき、この練行列が「誰云ふとなく、今夜十二人の市女の中に、姫の数が一人多い。凡て十三人あると言交はす」(二十八)怪異譚めいたものになることも納得ができよう。練行列は、彼岸での「思」の実現に向かい、日常を離脱するものだったのである。

注

- (1) 田中励儀「『南地心中』の成立過程——泉鏡花と大阪」(『泉鏡花文学の成立』平成9年11月・双文社)
- (2) 「読売新聞」(昭和6年11月8日・朝刊・7面)。なお、現在の大阪城天守閣の再建が昭和に入ってからであることについて、中島一裕氏のご教示を得た。
- (3) 拙稿「楊柳歌」の京都、あるいは清水寺——〈観音功德〉の顕現をめぐる——(『論集泉鏡花第五集』平成23年11月・泉鏡花研究会編・和泉書院)
- (4) なお、『南地心中』で「初版」が自らのことを「おのぼり」と呼ぶのは、棧敷に美津を迎え入れたときの二度である。直後に「おのぼり心の中に惟へらく、光栄なる哉」(七)とある。
- (5) 『新日本古典文学大系37 今昔物語集五』(平成8年1月・岩波書店)
- (6) 『新日本古典文学大系55 室町物語集下』(平成4年4月・岩波書店)

(7) 後述の『心中天網島』『新版歌祭文』『冥途の飛脚』は人形浄瑠璃の演目であるが、いずれも歌舞伎化され、『歌舞伎年表』第七卷(昭和37年3月・岩波書店)／第八卷(昭和38年5月・同)を参照すると、明治期にも上演される一般的な演目である。なお、『冥途の飛脚』は『恋飛脚大和往来』への改作を経る。『南地心中』での受容の様子からは、鏡花が人形浄瑠璃、歌舞伎のどちらを意識していたかは判別しにくい。ただし、多一が「久松」の面影をやどしていること、また役者に似た美男子であることなどから、鏡花が意識したのは、身体性がより顕著な歌舞伎の方であったのではないかと推測する。

(8) 『日本古典文学大系49 近松浄瑠璃集上』(昭和33年11月・岩波書店)

(9) 『日本古典文学大系52 浄瑠璃集下』(昭和34年6月・岩波書店)

(10) 加えて、久松の許嫁「おみつ」の名と多一の許嫁「美津」が通ずることを指摘しておきたい。

(11) 『叢書江戸文庫14 近松半二浄瑠璃集(一)』(昭和62年6月・国書刊行会)。歌舞伎の演目でもある。『歌舞伎年表』によると明治三十七年六月「歌舞伎座」、明治三十九年六月「市村座」などに上演がある。

(12) 『仮名手本忠臣蔵 歌舞伎オン・ステージ8』(平成6年3月・白水社)、『伽羅先代萩／伊達競阿国劇場 歌舞伎オン・ステージ20』(昭和62年7月・白水社)

(13) 『日本戯曲全集 第四十七巻 続舞踊劇集』(昭和8年1月・春陽堂) 所収「三升猿曲舞——兵吉猿舞——」より、長唄の詞章のみを抜き出した。

【付記】『南地心中』の引用は『鏡花全集』巻十四(昭和49年12月・岩波書店)、『鳥笛』の引用は『鏡花全集』巻二十五(昭和50年11

月・同)、ともに第二版に依った。すべての引用について旧字は適宜通行の字体に改め、ルビ等は省略した。なお、傍線は論者の付したものである。

(にしお・もとのぶ 帝塚山大学准教授)